

令和3年3月6日

令和2年度長野県蘇南高等学校・卒業式式辞

「いのちのリレー」に参加すること

長野県蘇南高等学校長 小川幸司

## ◇はじめに

本日、ここに令和2年度長野県蘇南高等学校の卒業式を、向井南木曾町長様、伊藤南木曾町教育長様のご臨席をたまわり、そして保護者の皆様のご出席をいただき、挙行できることになりましたことを、まずもって御礼申し上げます。

そして1・2年生の皆さん、全校がそろって卒業式を行える高校は、長野県内でもほんのわずかなはずです。今日は一緒に心を込めて、卒業生をお祝いしましょう。

## ◇保護者の皆様へのお祝い

まず、高校卒業というお子様の大きな節目を迎えた保護者の皆様に、心からのお祝いを申し上げます。本当におめでとうございます。

何気ない当たり前のことが、実は、親の大きな努力と苦労の上に営まれてきたのだと思います。毎日の食事をつくること、洗濯、学校への送り迎え、うまくいってなさそうな子どもに声をかけること、そして家族が生きていくためのお金を稼ぐことなどを重ね、親は、子どものために懸命に生きてきました。

しかし、子どものほうは、親との思い出を成長するにしたがって、どんどん忘れていきます。親は、子どもから「忘れられていく存在」です。むしろ、忘れられていくために、この苦労の多い親というとなみを日々おこなってきたのかもしれない。高校の卒業式は、「覚えられている親」から、次第に「忘れられていく親」に切り替わる儀式でもあります。

高校卒業後の親のつとめは、「忘れられること」です。そして子どもが大人になっても困ることがあったら、そのときには頼ってもらって、陰から子どもを支えていくことです。忘れられていくのに、なんで、こんな親という苦労の多いいとなみをしてきたのでしょうか。

おそらく100の思い出のうち、ひとつかふたつの思い出を子どもの心に残せれば、それでいいのだと思います。あとの思い出は、私たちが自分の心の中にしまっておけばいいのです。それが私たちの残された第二の人生を支えてくれるのですから。

今日の卒業式にあたって、私から保護者の皆様には、これまでの子育てに、心からの拍手を贈りたいと思います。

## ◇いかなる困難にもブリコラージュしてきた卒業生の皆さん

さて、卒業生の皆さん、いよいよここ蘇南高校からそれぞれの道に歩みだすことになりました。あらためて、心からおめでとう！

皆さんは、日本の歴史上、「悲運の学年」と呼ばれるのかもしれませんが。文部科学省が新しい入試制度を開始する学年として、英語の民間試験とか共通テストの記述試験を導入すると言っていたのに、計画のたてかたに不備があり、途中で撤回されてしまいました。高校生活の後半は、新型コロナウイルス感染症のために度重なる臨時休業や行事の中止、部活動の最後の大会の中止、日常生活

の制限などを余儀なくされました。でも皆さんは、あきらめず、自分たちのできることを懸命にブリコラージュ（自分の経験と知識を総動員して壁を超えること）をして、ここまで歩んできました。そして各自の進路を実現してきました。皆さんは悲運の学年なんかではなく、素晴らしい思い出をつくりあげた素晴らしい生徒たちです。

#### ◇他者の幸せを探していけば、自分が幸せになれる

蘇南高校の目標は「開拓者精神」です。それは未来の世界の幸せを予想して、今の自分が努力することだと、私は折にふれて語ってきました。今日から近い未来のことを予想してみます。

未来についてしっかりとした予想をたてている人々に、「世界経済フォーラム」という、世界の政治家・企業経営者・知識人が人類の未来を語り合う組織があります。「世界経済フォーラム」の会長を担うクラウス・シュワブが書いた『グレート・リセット』という世界的ベストセラーでは、コロナ感染症の影響は、少なくとも2021年いっぱいには避けられない状態であり、2022年くらいまで続くと予想しています。ワクチンが人々に行き渡り、集団免疫が形成されるまでには、どうしてもそれくらいの時間がかかるのでしょう。『グレート・リセット』という本は、私たちが今まで当たり前だと思っていた世界の姿にリセット（やりなおし）がかかっていくだろうと予想しています。

就職する皆さん、会社の経営方針の転換から、勤める部署が変わる場合があるかもしれません。勤務する日が減り、給料が減らされてしまうこともあるかもしれません。場合によっては転職を余儀なくされることがあるかもしれません。でもこれまでブリコラージュしてきた皆さんならば、きっと、この状況下で自分が工夫できることをあきらめずに考え続けるでしょう。大切なことは、仕事と言うのは、単に生活費を稼ぐだけではなくて、誰かを幸せにして、自分も幸せになることです。どうしたら人を幸せにできるか、このことを考えていけば、部署が変わっても、勤め先が変わっても、皆さんは乗り越えていけると思います。自分自身がたえず変化して、時代に合わせていくことができるはずです。

進学する皆さんは都市部に転居していくことになります。どの大学・短大・専門学校も4月から対面授業を開始する予定ですが、第4波・第5波が来て、オンライン授業にきりかわる可能性があります。進学先での最大の敵は、孤独です。オンライン生活で孤独にならないよう、4月当初になるべく早く、新しい人間関係を作っておきましょう。人間関係の構築に悩んだら、是非、どうしたら人を幸せにできるかを考えてみてください。都会でもいい、帰省した実家でもいい、ボランティア活動の仲間に入るのです。誰かと世の中の幸せのために活動していれば、必ず自分が幸せになれるます。

つまり、就職も進学も同じなのです。世界の幸せを予想して、自分が努力すること。開拓者精神です。そうすれば、おのずと自分が幸せになれるはず。

#### ◇「いのちのリレー」に参加する

内戦の続くアフガニスタンで人々のために井戸を掘りながら医療活動をした中村哲さんという医師がいます。2019年に残念ながら誘拐されて殺害されてしまいました。でもアフガニスタンの多くの人々が悲しみ、中村哲さんの仕事は今もなお受け継がれています。中村さんが、生前に書いた『アフガニスタンの診療所から』という本の中で、ある山の遭難事件を引き合いに出して、人生とはこういうものかもしれないということを述べています。そのくだりを朗読しますね。

——ある時、三人の若者が山の中で吹雪にあい、遭難しそうになった。C君はぐったりして動けな

くなった。とほうにくれたA君、B君のうち、A君は頭の良い人で、「このままでは皆が危ない。ぼくが一人でさきにようすを見てくる」といって二人をおいて身軽に行ってしまった。

ところが、待てど暮らせどもどってこない。残されたB君は、「まあ仕方がない。ともかく凍えるよりは」と、たおれたC君を背にしてとぼとぼと雪の中を歩きはじめた。さいわいB君もC君も救助隊に助けられたが、途中で彼が遭遇したのは、なんと先に一人で進んだA君の死体だった。その時、B君が電光のようにさとったことがある。「ぼくはC君を助けるつもりで歩いていた。だが、じつは背にしたC君の体の温もりであたためあい、自分も凍えずに助かったのだ。」

(中村哲『アフガニスタンの診療所から』筑摩書房、1993年)

中村哲さんのことばに、私たち蘇南高校の教職員は心から共感できます。なぜならば、3年生の皆さんを時に背負ってきた二人の担任たちのほうが皆さんに温められてきたのだということ、私たちは見てきたからです。そして今、皆さんがこの世界に生まれてきてからずっと背負ってきた保護者の皆さんも、実は子どものいのちに支えられてきたのだということを実感しているでしょう。

これからは、卒業生の皆さんが、誰かを背負い、その温もりで皆さん自身が幸せになる役割を受け継いでください。それが「いのちのリレー」です。

最後にもうひとつ。皆さんはこれまで自分の生まれた「ふるさと」に、「ふるさと」の自然とか人々の温かさにも背負ってもらってきました。おそらくこれから皆さんの「ふるさと」は、南木曾・大桑などの木曾地方も、中津川市も、急激な人口減少に見舞われていきます。「ふるさと」がずっと今のような温かさを保ち続けていくのが難しい時代がやってくるかもしれない。

だから日本全国どこに住んでいてもいいから、それぞれのやり方で、皆さんが「ふるさと」とつながりを持ち続けてほしいと、私から皆さんにお願いします。「ふるさと」に住み続ける、何年か後にUターンする、毎年何回かは帰省する、それぞれのやり方でいい。「ふるさと」を応援してくださいね。

では皆さん、私はたった一年間だけでしたが、皆さんと出会えて本当に幸せでした。皆さんは、私の大切な教え子です。誇らしい教え子です。

長野県蘇南高等学校から2021年の世界へ、心からの拍手とともに、皆さんを送り出します。さようなら。

令和3年(2021年)3月6日

長野県蘇南高等学校長

小川幸司